

9 10 1 2 3 4  
JAPAN

20

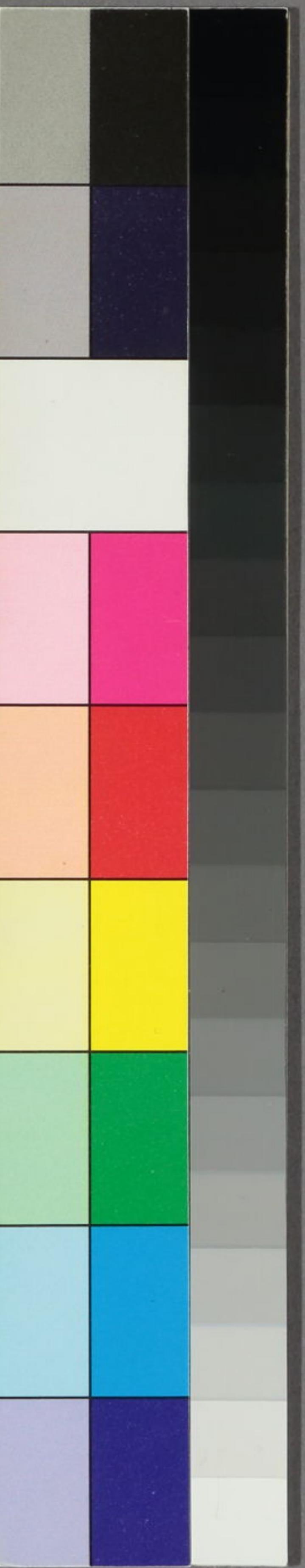
30

1 2 3 4

5 6 7 8 9

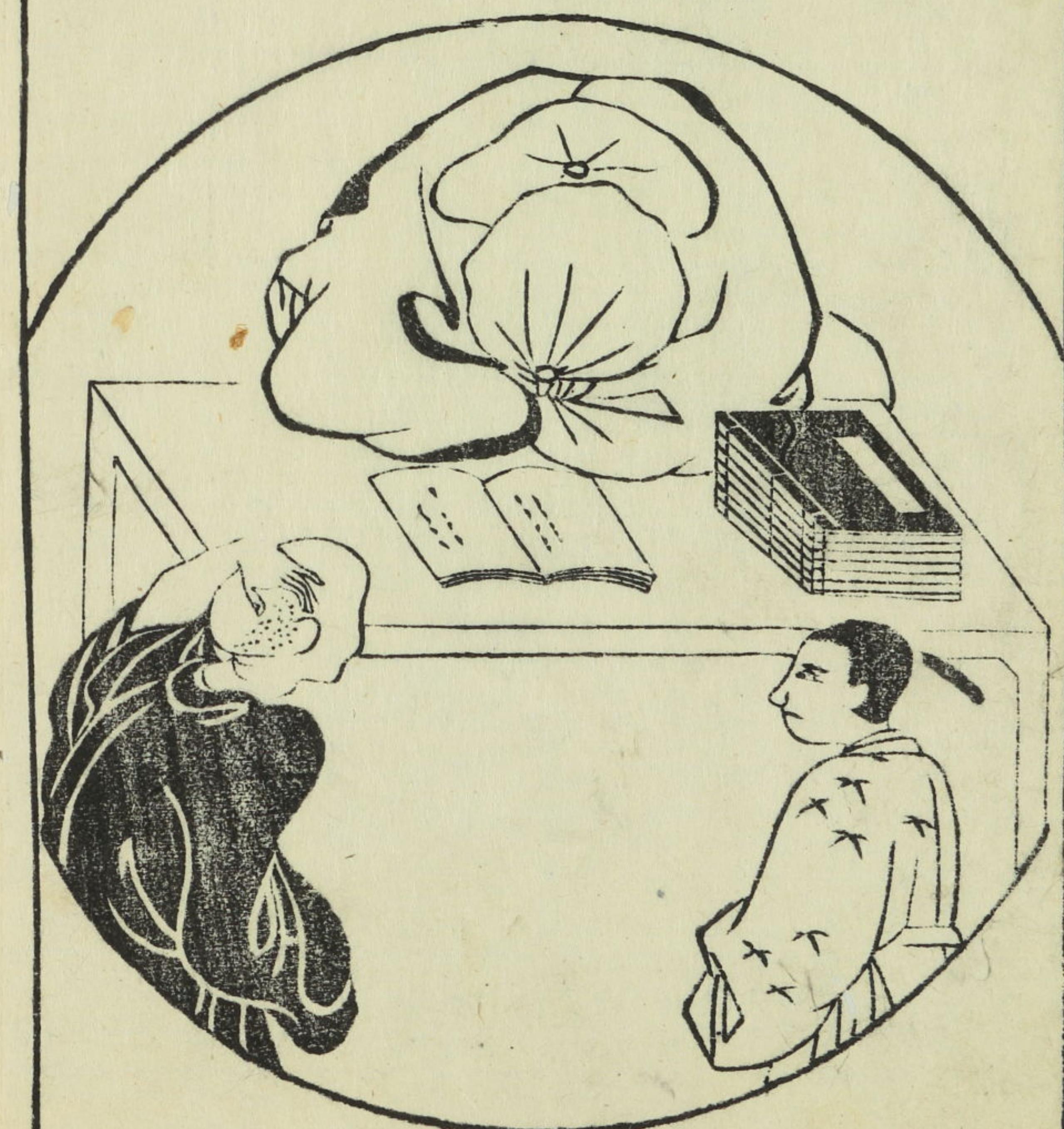
俳諧古今抄 再模貞享式

日之二





# 言 頻 圖



他説古今お至り上

## 物序

## 蓮二房

今より他説古今お至り上は、『後漢』の司馬遷の史記  
と清松旨がてまとひれの六松に名とす。而  
て訛諺の一通とせり。『東陽』の諺名もこれと  
稱す。清松旨は能説の事と云ふ。是一決  
の計えある。『後漢』を元のちまことす。而て訛諺  
と云ふの解法は、いかにもさうせり。されど其の如くす  
ばれて、どうぞよきとゆべからず。

連能の言ふと似て運能にて一審の文を讀むに  
云ふとテ、レーベル古今集に、いづちらモ度の裏詩  
もく詠説の文まとどりたれ候と和歌の家と連歌  
の序と人傳と言傳二字論あれと被又歌の邊  
詞より例へ歌家の極とほ、シテ代行對一  
空手歌とよへて、かくして詠説・俳諧とを  
准すがてや近のきくひあつてはとがりと一  
ふれど、スリニ射の用と多くによけりのちと  
もくへ文子の傳とよつてやしめくらば  
詠説の真とボとえひ發て其歌の東をすと

あまほ中間の十首條へきとて詠説の區言  
をもじて後句の罪とよもじりて、畜守へすす  
ヤムク他説と詠説のきくひあつりやすと古今  
の用と用とあつて、前へ詠説の真とボとえひ發  
せす首條へた傳の格とくらんとあつて、もとと  
ひて石せのやういとこくとぞく、仰詠説  
の通すてやまともとせ木堅あれらば、直  
一部の次中を例へ上中下せし巻をうりと日月星の  
ことあつがて、詠説の十九條と、二冊は

これらは御の所錄と二冊とて御の事と一部  
又冊あるせしに題をせ走る本をかう運搬し  
行をせまつて中古を詠説を運ぶにゆりて  
遠くたゞの滑稽言とたゞ近く。今古の能説と  
ひらもうつり能説。今おども各所くるらむ  
せんべ一部の土地をすと祖孫の能説とあふ  
てこの千葉一斬の科訓あれ。先所の古とれま  
すとほへあじとて一刀兩断のば詔めり。まもい  
連歌の兩式すりは今年とつひき言わせてば  
和そせざとすねあ。詠説の五ふのあ

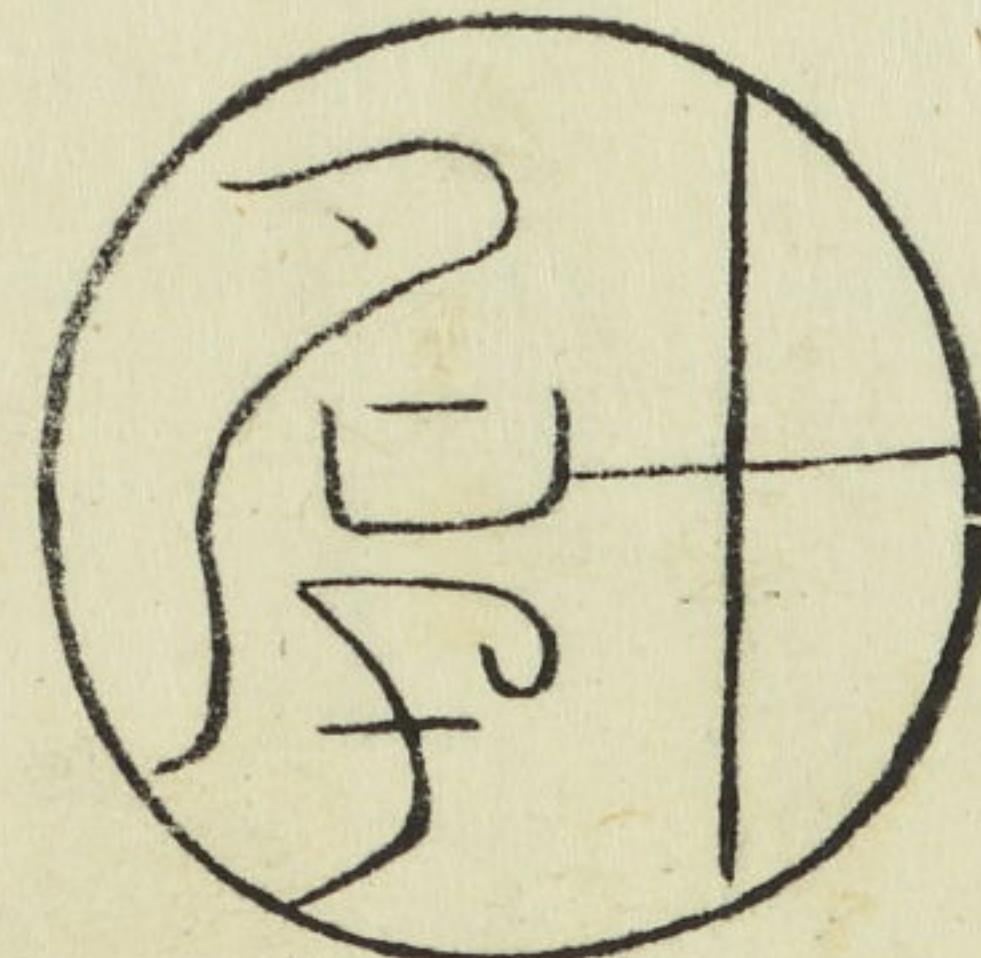
云ふ敵上の湯奥とてかと士農工商の事と  
へえもよみなどもむれ難詞へあひて雙達ツダツとす語  
とあらむじと今れ能説の只用とれとを觀  
のまくいかんやまくい連式といひよすもあ  
はうて詠説とりとくとあるとくに満て満て能説  
とんうて真まざま年も月も上げぬけと制衣  
きもとよーととくと其式の大本あんざや  
詳と論とくへ中の能説を皆く連式の式員  
とりく。佐詠すとあらもとられ、聖文院  
守り四三事とぞうとひくへまくとくとく

まうひあらんや、落と、落とにならとあへ  
またそれ能活の様とあるもあると、かくも詞と  
ソシカケテ運音を附すが、さういふ事の  
名とぞよアソシテは、ボの名と、かくもと、うかじ  
あへ、眼子と、かくして、一宇一言お説きと、うかじ  
まうひあらんや、ボの名とぞよアソシテは、す  
ぐそむかへ、とぞよアソシテおも舞と、かくもと、うかじ  
え、胡越の金刀アふへんや、ももきしげおの  
あ、本うちや、ソシモ一通の達手と、あへ取ると  
燃灯の、とほりア成とぞよおも舞と、あへ

まうひあらんや、とぞよおも舞を數のま  
とぞよおも舞とぞよおも舞とぞよアソシテ  
ももきの跡と、おもむんと、と傳つて、何ん  
アソシテの、祖と、あへ、じよ傳仰の大道も  
そも、お祖の、極つた、アソシテ、もの智にひろ  
アソシテ、百金と、おも舞と、おもむく、おもむ  
おもむく、ゆづれ、おも舞と、諸人の感作と、おもむく、  
おもむく、おもむく、おもむく、おもむく、おもむく、  
おもむく、おもむく、おもむく、おもむく、おもむく、  
おもむく、おもむく、おもむく、おもむく、おもむく、  
おもむく、おもむく、おもむく、おもむく、おもむく、

一此の私とりれまんとあるてする國のひづり  
をひて山々の鎧地而より神と詔おまえ  
おひあくその林めどもまきひ破ゆ候やがて  
ひきて併誥のこよせゆくねさん

李傑  
己酉之月吉祥日



### 古今抄凡例

- 一古今抄ニ○今接トハ祖翁ノ用捨ナリ且下ニ新古今ノ  
遠因ラ考ヘシ△再接トハ先師ノ監寧ニシテニ接  
トハ蓮ニカ拾遺ナリニ只ハ今ノ相歎ニ知レ
- 一古今抄ニ寃評ト冤譏ト明監トニ改ノ差別アハ法ニ  
支配ノ輕重アハ一座ト云イ一世ト云イ而廿ト云ナリ  
總テハ新古今ノ決論三百慮一失ノ辭宜ト知レ
- 一古今抄ノ省法ノ下ニ或ハ家語ノ詞ヲ假テ實見猛ノニテラ  
云ル制度ニ時代ノ事ニシムイ或ハ用ハ其人ノ自在

ニテ用サルハ其人ノ不自在トハ今ト式ミテ乳明セス仄  
古風ノ偏屈ラ山明ニトナリ或ハ先師ノ再撰ノ下ニ鑒  
如是ビハ仏經ノ如是我聞ニ滅後ニ再撰ノ誓言語ナリ  
一此抄ニ證句ヲ舉ルニ至ラ定テ名衆十キハ總テ祖翁  
ノ證句ナリ系シ定メスヘ此印ヲ書テ直ニ送書ナル  
多々先師ノ證句ナリ但レ別人ハ句下ニ其名アリ  
一此抄ニ墨園ノ印ハ總テ文法ト句格ナリ然ニ文字  
ノ傍ニ隔テ自園ノ印アルハ或ハ劫字ノ節目ト知ヘテ  
或ハ對詔ノ相致ナリ知ヘテ或ハ改ノ要文ト知ヘシ  
一此抄ニ古式トハ多々連考ノ兩式ヲ指レ古抄ト、貞傳  
佛金ヨリ埋木嘵叶ノ類ナト一部ニ埋木ノ名ヲ指  
ナル師資ノ辭讓ラ察第スキナリ或ハ稀ニ本末ト  
云ハ今ノ貞守寺ボノ本文ヲ指テナリ

一此抄ニ墨名異射トハ或ハ牡丹ラ御見草トハ異名  
ナリ牡丹詳ト、異射ナリ或ハ音訓ノ差別ト、自雲  
ラレラモトエフニ名ハ異ニシテ射ハ同じ也故ニ墨名  
下云イ異射ニト云ル今ホト古抄遼固千箇條  
ノ古法ノ下ニ悉知スレ

## 再撰貞享式序 並目録

東方在坊

の御本ととくりて訛言連語の所作ととくと他説  
いきと次第の論の上にて士農工商の人とらひ  
下字と達の全言より保中毛凡紙とあうりに  
もはや十九條の裁断と訛譜の字論ひます  
「赤向」か字のふねむり眼の筋字しや三字  
遠はしに花へ月せあらひし持手と玉葉と同名  
異用の設あるいと有りと古にの名とありて  
へ今すの當用とあくとせと詩文の連派アリ  
ばよこかととすぢかととすぢかととすぢかと  
へかた草紙の密撰アリ事と相故の書入

あり事をちて消されしるありゆでこそ時も人  
よじうひて口承めばほしむる所とへて再撰  
の場所からみておそれても難むるまこと壁室  
お角のあやよりほんきよとく竹移のすれ  
あんよと利園の間ことじくとおもわことばを  
達をかんら紙の編図あじゆとどき 武路  
の左のへと説けじまとたとくとたとく  
不とけ書とりそぞ一巻一段の宣とひととて記説の  
有りとらやあれと他説の今式へりのまことと式  
五はよもと生じて書かむれど書めの和とさ

近くとけ撰の表現とまうて他説を以てはま  
論よりうとせばに、互備のまことやうけ詮諛  
詮諛の用ちらとまうて、かよふとくがせ  
てとくとまく金を放翁の接種しててる建行  
のとせとあわよと色解器 譯解

寶永七年十一月二日

皇室同錄

大段ハ本式ノ同錄ナリ  
小段ハ再撰ノ附錄ナリ

- 一俳諧と諧諧ノ字論ナ事  
一他諧と諷諫の通ある事  
一六義と今之和訓ナ事  
一多發句と切字せざるにある事

附 心ゆかず 中ゆかず

揆叔ゆかず

- 一切之に差ぶある事

附 二字切ゆかず 二字ゆかず  
三段ゆかず 二段ゆかず

- 一心ゆく多合ある事

附 どぬりのす 不ぬりのす

大廻のす まかゆかのす

- 一押字と捺字せ事

内 句讀ゆかず

無名ゆかのす

- 一ニ品ひぬふれ事

附 併載ゆかのす

穀歌のす

一 えひひわや。のすせ事  
附 うせすのす

一 かんせすのす

一。じすのす

一 百聲。表ハ句せ事

附 発句。いゆのす 聞て能子のす  
オシモ奈波のす 写月の経

一 四折。曲節。せ事

附 無而と句作ひす

撰集あらゆりゆのす

一 月花。せ事

一 指念とま縁。せ事

一 壱向。せ事

一 季節の跡。る物。せ事

附 二季。三季。四季。りう物。のす

え。の二季。へく句。去。き。や。のす

一 季とあ。新とある物。せ事

一 各町。雜の發句。せ事

附 新。躰。のす 四季。格。のす

詠説。す。のす

一 四季子の名類之事

一 仇諧と假名遣之事

合十九條

古今抄序同終

并撰真言寺

目之一

古今仇諧序

芭蕉庵

古より我家の仇諧を二千歳のじへと名ありて  
周奉手の比べり、証據ともされ御観の間と詮矣と  
いふしれり、史記とこれ門のばあよげりへて  
和洋ノ凡雅の一つとどもあれりをりきるに申し  
の説得とすと、應安の新式とばとちくい慶長  
の傳金とひろまつて、お合とせりとを繰と  
さくじりえりとてんせの云々とあひて、東洛と

まことにすがくされし中ちの地説へまに  
連うせせすとてひては、地説の發言とあつて  
今せ地説の次すとて一きよゆるをうひて、下  
まづはしたのじゆひゆうたとらふとんとれと  
仰ひゆく教説の二にあつて、社くわあじま  
りそりも大和の風雅と傳書の風よこすれ  
て言説をあくべの遊あんとあらうと古人の  
詞しやうにとせりはとあらはとせり能  
こと教よ法よ約説うへはくとく連れて  
むくよ效よとむむむとく今せ地説より破く

唐とすてじ言ふあきい遊う室とすて秋りと  
はとじへてすよや重典の控へしろとてりあ  
かとこうかんすとあらひばと年月とあらす  
ととみとく和歌しむせわ年のじみとらす  
れ子の家訓しむせ政種政の左訓と称しむせ  
あいとくよともとむとおひなすとて地説の事説  
ちり張こまよのよまほとへて是の内説と  
もととあれ、極く要とてらとくまや實やう  
こ善ととくじへれ、うにほすの實種とくを  
て用やうとせんの自在とて用ひうりとくの

不自在と云ひてはれどもひそにれ前の  
二三子とらへて御つぶ拂傘より嘆惜せめとき  
しもくまもううとれまもと川がうち耳、目の  
ふをあんぐり取捨る一子の私あく今や一種せ  
裏ほり近く一せの實譜と竊ひ遠く百世  
の御籠よはうを天の冥念とすまもや  
そとも一痴の抜記つゝにはすめむとくもく  
はすの名よはと、さうかく

貞享五年戊辰孟春如立良日

角撰貞享式

○能諧と詠諧と字論記事

じうじう能諧と詠諧とと和音の字論を論  
あれと詠諧の索隱と僧智、能諧、能諧、能  
惟ちりに文ありて、くせなくせほ林と詠諧の能  
がれてゐると詠諧のやじー延喜の仰代か  
おや集もつけさき詠諧の二子と引つ和歌の能  
とあるとさり詠諧集もされ二子と用ひし漢江  
同名の他語ありや傳より別名の詠諧ちらや古文集

レ副假名あされへまろよみよひやせよひり  
レ訛語くとよもまれてソリトウ風雅の假名  
ナカレルもあソハモシおとくも解スルトナド  
トヨ能訛ニテ訛語ニテ能語四ツト僧種音  
佐輔の奥儀おとしゆ下宗祇の青美多ミ詠ハ  
甫尾カシテ訛ハ朗旨カトあれハ能證ト訛語を  
アセラシテ詠語の非比前あととあるとあれを重  
ドリ代ヘテ詠のまと引シあソト先比をカヨタヌ  
テキミト有ラキトスもあれハ代行ト對ヘテ穿鑿を  
ヘテ次シエラシトスの御詠ヒリト所資セホ裏  
ナシテヒツヒセ

東左云△角接モクシ所ノホシく人偏の  
作字トサヘテ一家走立のまじとスカラ  
鑄セ憤俗トスル本色の書也過當とけづ  
テ代行ト充鑿モトスル事と之例ノ詠壽の  
遜言ちりセモトスル所論トリ運主セモ相  
ウシモ訛語の名義と語減リテ今之能語也  
當用とえくニ同大異の故とモトスル事も  
アラカシ能語の遊戯ちりとキムシナシト  
詠語の空虚ちりとちそれテ中古の能語の角

とす用ととまつはふとす眞言す式よひにしお  
さくよとむりアヌがおも治のえをと  
ほく

傳本

也

○ 伽誦・訛諺の通あり事

天地とそにひもすは天とありせんありと通  
いとてせりゆと人たとくそりきりもとと人間  
の私うりるニ前のもうしめうと書うるあ  
西とあわると秋迦と西とまくとまくと  
まくおひみすと空とりまく秋花とまくと  
まく

空へ左在楊墨の風月をひづとを極ふと術の  
そくまくせ曲居と商の家業ととくと歌謡能  
の貞新とあよせと人向の世ととくらせれう  
中主他諸の一人をほせまく滑稽旨の各へ阿敷  
用奉せしりともんかとあられも魏晋のね  
もじまとまくと今とくに固くニの余處へ  
るあうてはあくとよすや。今持どるに伽誦の  
道へ左在の高遠とおそれより傳記の虚實  
とやうけて訛諺とりてゐる。訛笑と  
はとあく。世にとくの用ととくもとくじふ

詫諱して是を以て謂稽首へ贊詔の法をもとす  
もと、うもとあれトセハトヌ倫の和と本ツア  
君文の善とよしよしも婦夫の悪とモリにモ  
善と善と一惡と惡と直言とカレ直諱  
されハシメ付シテ人の様様とカムキミされトシ  
大スミシキヤモレハシメ王といふ  
恐ヌとあヒトニシメられ、惡と善とゆくと  
傳仰の一音ノ感動もされテ或と善スルノ  
足りあややと殿村のとモ、惡王とされ、惡と  
惡とありテヒ干ニ脛とキシムトクアキ人の肝

とナクハシメニアシジタル人面の善惡トクル  
ハ千方編照のためとシムラヒ神震動せ特  
とあヒタシテシヘトヤマケテ我名をひりシテ  
シムテ楚の子西と西王の侯トテスモトナビ  
詫笑より楚王の歎をキモシテナシヤウキ  
モとモリ傳仰のままで諱官の五義オサヘト詫諱  
トナシテ最上トナシキセ子西とももおひるにモヤ  
傳仰ナリ仰ハトシ提摩等トシハ詫諱とアラヒアズ  
ナムトシムラヒトシアツ善人とあヒシケ智見れ  
教セシムシテアヌモアヌモ祖とあれアレ詫笑を

りて獻れやくされと直諫より人せんせつとて在今  
あら人のいふやうをふくらむと云れハ能譖の  
名とすと北齊齊家の一助とては庶ども之  
又論とやらきしよく傳仰の大名とすと云ふと知  
「まことさとけ」訟諫うち「一義にわざく」方謂  
贊く正諫以明節明節不可以文安せ故  
訟諫以取寃容りとせ贊以訟諫の内殺とてく  
竹文と訟矣のが現とてソラテ諫と能譖とある  
人をよしゆきとすの能譖たとえありてひそか  
「まことがれよ高遠の风よあらひ敏捷の智よ

ほりてたゞ其に相に附のとまじ一言の下に崩破  
一歌人連音と揖讓とあつてもあら達行の  
まじあら虚実のちよとにまじふはあら名に  
せれ人和とあらとよしあらね有るの今更用とある  
原壤と夷北叱言レ類圓と樂北贊詞と一分ハ向  
のまじひあらとよしあら百人の方仰とぼくいで  
一石よせ岸上のみよからうとくまじアフロ川をか  
まじ年よせ金と通の極不アフ一万能少方義雲  
よとすあれば自證とまじニシ子テにせん  
とまじハ能譖を高下せ媒うちをまじ運歌よ

ゆくをと詠誦よみとかひど五七七句法を言語の  
あといづて例の詠誦よみと云通とあり。例七  
詠笑よみと云ふはとあると一そうい詠の達す  
不<sup>ト</sup>トトトと月をせくお實じつ誦よみる事也。

東不云い一體の西文にしぶんと傳つたいのみを迂遠迂遠  
説せき者しゃをの人のが高舉たかよと新しんて能のう活かり  
せばの隨つづ一いつとあさりたことと走行しゆこうのことせと  
つつい下字げじと達たつの用ようとついて文章ぶんが虛うつ々うつ々うつ  
うに跡破あととへらはりあくあくれの大言だいごん  
差子さしこの虛説うつせきの字じを爲するべしと天道あまぢゆ

○六義と今いまの和訓わくん七事

古キニヒテ莫まニシテアリニ清きよガムニ御ごシカヒテ  
我わムハナヒ集ひつムヒキナヒテ連つづキヒ詠誦よみ  
モの詠よみとウリヒ賦ふ比ひ興き新しん頌しゆともモサムサム  
各かく目めアリ凡ふん雅頌やしゆと經きと詩し賦ふ比ひ興きと韓かんと

あきらを許の行義れば法ありとせよとす  
六美の徳を和漢ともに今あるとぞと集味  
古語すもがまことあ能よきれんすとえあらま  
きとうとうとくもがの六美りすとせすまれ  
お月 やしは賦比興の二名と訓すに似て  
てある和音とありせり連音とひげども一聲一篇  
の約とあらじとせや當叶せ詠おふとよく  
推量せば古と云ふ。○今推もとて云能比  
差ふと凡新頌の二種と西畠の人也と詠論  
南唯と哀乐ととあるうとく王侯士民の心

とほりやうち鋪比興の二緯と眼界の異物と詠論  
ノテ論語、文質とヤリゆうことくも歎竹木の  
名とモドリにモナヒトモ人とや。皆、學と能の  
の風流おとととせむるの優れとせられ、能の  
ハ王侯士民ありあらひ。○天下おけひとひを收  
ちと一まれ、能谱の六義と地利と人和北  
二用、人情と各用とゆりあをすと名づくも用  
とあらけと引向とくゆくと前すと后すと定  
六種よ六色の常用と和訓のあやとある一小セ  
みを能谱の新製すれ仰れと和聲の学

字ありモアビトと称内ノ靈譲スリケン

## 風

訓義ニ凡トハ訓諭ナリ爰ミハ言ト訓スレ和歌ニ

ハ副歌ト訓レタレト比興ノ二駄ニ節ハシモ詩曰凡者  
多出於里巷歌謡之作田舎相與六詠歌名譜各譜  
其情周南召南親被文王之化ニ爾為風詩  
之正經云然レハ其國其人ノ風俗ノ蓋屬ラ風謡ニ  
依副テ差ニル故ニ风化トモ莊セナリ○今按人臣  
风化モ風俗モ總テ詩歌ノ詔諫ニシテ上所化スルイト  
下所習曰俗トモ上以ニ风化シラハ皆刺上トモムヘリ  
何レモ時代向謗ニ<sup>ヤリウタ</sup>録倉代菖蒲ノ謡ラ作りテ

其代ノ流樂ラ刺レニ類ナリ○獨按スルニ秋家ノ訓  
美ニハ風諭ニ卒ノ意ラ連ニテ諭言正訓スキヤ  
然ラハ俳諧ノ卒ト成セル詔諫ノ和ニモ叶フ<sup>ム子</sup>ヤンカ  
去レ正名ト太騒トハ此等ハ而テ明醫ラ待ヘシ

## 雅

訓義ニ雅ハ正ナリ直ナリ爰ミハ正言ト訓スレ和歌

ニ直言歌ト訓レタレト平諧ノ徒言ニ紛ヒスレシ  
傳語ハ音訓ノ響ラ憚ルヘシ○今按スルニ風雅ノ二駄  
ハ漢書ニ詩經ノ所成ルニテ凡ハ虛ヲ以テ天ニ起り雅  
ハ實ラ以テ地ニ止レ詩經ハ此ニ美ニ溫觴ニテ乾坤  
ニ巻ト成レリ故ニ我家ニハ風雅ラ虚実ニ用

ト見テ凡ニ懲惡ノ虚ラ用イ雅ニ勸善ノ文ラ用  
レハ雅ニ正直ノ意ヲ汲テ公言<sup>ナホヤ</sup>訓スキヤ<sup>ナホ</sup>等  
ハ異<sup>ニ</sup>各同躰ノ例ニテ一セノ實謹ニ據<sup>キ</sup>ナリ

## 頌

訓<sup>マニ</sup>頌<sup>ハ</sup>称ナリ義ナリ爰<sup>ハ</sup>祝<sup>ハ</sup>言ト訓スシ和歌  
ニ毛祝<sup>哥</sup>ト訓レテ引歌モ紹<sup>ル</sup>前ナレ然ニ詩序  
ニ雅頌<sup>ハ</sup>躰ノ様<sup>シ</sup>ト雅ニハ國家ノ詠諫<sup>ラ</sup>令口ニ  
故ニ六美ノ引歌モ頌<sup>ノ</sup>躰ノニ明ニテ其外互名  
ハ紹<sup>ハ</sup>レ○今梅入ニ毛詩ニモ雅頌<sup>ノ</sup>篇<sup>ハ</sup>朝廷郊廟  
樂歌<sup>ノ</sup>之詞<sup>ナウ</sup>其詔<sup>ハ</sup>和而莊<sup>ハ</sup>其美寬而密<sup>ハ</sup>正

之於雅以大其規<sup>ナリ</sup>和<sup>テ</sup>之於頌以<sup>ナリ</sup>其止<sup>リ</sup>也影  
詩<sup>ヲ</sup>之大旨也<sup>ト云</sup>然<sup>ハ</sup>雅頌ノニ用タル外ニハ莊密<sup>ハ</sup>  
次<sup>ナラ</sup>備<sup>ハ</sup>詠諫<sup>ノ</sup>正直<sup>ラ</sup>行<sup>ヘソ</sup>内<sup>ニ</sup>ハ和貫<sup>ノ</sup>情  
ヲ含ミテ詩ニテ優美<sup>ラ</sup>調<sup>ヘシ</sup>爰<sup>ラ</sup>れ<sup>ナ</sup>予<sup>ノ</sup>豈否<sup>ハ</sup>  
和<sup>ハ</sup>節<sup>モ</sup>此謂ナリ之經<sup>ハ</sup>削<sup>ハ</sup>溫厲<sup>ラ</sup>知<sup>キ</sup>ナリ

賦<sup>ト</sup>訓<sup>ミ</sup>賦<sup>ハ</sup>鋪<sup>ナリ</sup>爰<sup>ナリ</sup>爰<sup>ハ</sup>美<sup>ト</sup>言<sup>ト</sup>訓<sup>ス</sup>シ和歌  
ニモ<sup>ハ</sup>美<sup>ニ</sup>歌トアリ文選ノ李詩ニモ<sup>ハ</sup>事<sup>ナリ</sup>明白<sup>ナリ</sup>  
ト云<sup>ハ</sup>眼<sup>前</sup>ノ物<sup>ヲ</sup>美<sup>ニ</sup>並<sup>テ</sup>直<sup>地</sup>次<sup>ナ</sup>情<sup>ヲ</sup>演<sup>ル</sup>  
謂ナリ定<sup>ニ</sup>哀<sup>シ</sup>ノ叙文ニモ賦<sup>ハ</sup>歌人<sup>ノ</sup>本意ナリトハ

四季ニ月季ヨノ季変相ラ詠シ花阜ノ優游ヲ知レト  
ナリ賦ハ殊ニ文章ノ物名ナリ

比  
訓美ニ比ハ比喻ナリ寔ニ准<sup>ナウス</sup>ト言口ト訓スヘシ和歌ニモ  
准<sup>ナウス</sup>歌トアリ寔ニ托物比興トハ詩人歌人ノ優情  
ラ詠<sup>ミテ</sup>鳥ニモ木ニモ物ラ言ハス類ナリ或ハ韵書ニ  
比テ子ラ系衆采<sup>ミテ</sup>比<sup>ナウス</sup>於物<sup>ヲ</sup>與<sup>ハス</sup>托事於物<sup>ヲ</sup>  
云<sup>ヘリ</sup>○今梅スニ比<sup>ナウス</sup>魚トハ姿情ニ先後ノ心得アリテ  
比ハ物ラ取テ宜ハ姿ニ准<sup>ナウス</sup>ト<sup>ハ</sup>魚ハ物ニ托テ其情ラ起ス  
物ラ催入ト物ニ催<sup>ハシメ</sup>ト自他ノ差別ラ知<sup>ナリ</sup>也<sup>マサラ</sup>  
他詠ノ微中凡解紹正云<sup>ヘキナリ</sup>

興  
訓美ニ魚<sup>ハ</sup>誘引<sup>タマナリ</sup>寔ニ<sup>ハ</sup>誘言ト訓セシ和歌  
ニ六喻<sup>ナウス</sup>ト訓レスレト凡<sup>ヒ</sup>ニ訓ニ<sup>ハ</sup>紡<sup>ハシメ</sup>レ然<sup>ハ</sup>魚<sup>ハ</sup>字  
ト凡<sup>ハ</sup>字ノ和訓<sup>ハ</sup>六美中ノ太騒<sup>ミシテ</sup>我<sup>ハ</sup>ノ衆謡<sup>ハ</sup>  
如是<sup>ナシ</sup>ト百世ノ明監<sup>ラル</sup>心<sup>キナリ</sup>○今梅スニ魚<sup>ハ</sup>  
一美ハ和侵<sup>トモニ</sup>令明<sup>ナラヌヤ</sup>志<sup>ハ</sup>論詔<sup>ハ</sup>陽貨<sup>ハ</sup>篇  
ニ子路<sup>ニ</sup>詩經<sup>ノ</sup>凡<sup>流</sup>ラ勸<sup>テ</sup>詩<sup>ハシメ</sup>可<sup>ハシメ</sup>興<sup>ハ</sup>ト<sup>ハ</sup>四季  
ノ月雪花<sup>ハ</sup>阜<sup>ニ</sup>誘<sup>シテ</sup>優<sup>シ</sup>游<sup>ハ</sup>情<sup>ラ</sup>魚<sup>ハ</sup>セトノ  
謂ナリ<sup>ナシ</sup>ル<sup>ハ</sup>例<sup>ノ</sup>朱註<sup>ハ</sup>多發<sup>起</sup>志氣<sup>ヲ</sup>ト<sup>ハ</sup>  
云捨<sup>シ</sup>ハ孔子<sup>ノ</sup>宣給<sup>フ</sup>似<sup>ハ</sup>而非<sup>ハ</sup>ナル物ニヤ興<sup>ハ</sup>  
次<sup>シテ</sup>遊興<sup>ハ</sup>ノ興<sup>ハ</sup>ト<sup>ハ</sup>註<sup>ス</sup>レ<sup>シ</sup>詩<sup>者</sup>人心<sup>ニ</sup>感<sup>ス</sup>

物而形於言之餘也トハ朱氏や詩序ニ云  
ナカラ何故ニ自詔相違セリヤ此等ハ教誡ヲ先ニテ  
文章ヲ後ニセシ論詔一部ノ取違ニテ先後ハ例ノ  
察スキナリ卷ハ魚ノ美シ以テ詩歌ノ大本ト  
知キナリ

○發句と助字の用法ある事

むづりゆゆするを十八までありて和音も連歌  
風とさればあれと例の所取トモさんとあらね  
ハ主と都の心地とまことうやうう自とく官詩

すまへと内の中の連音よりそらくの合用  
あれども全く連音を用ひずれハ必ず連音の  
准として同形不<sup>レ</sup>用のきくひあひとお一<sup>レ</sup>せとく  
やすの用とすと物と對して差のまえせわを  
えくと増ととけて物と二ともりぬけ能ひる終  
あくテ第二章セ翁句ととあれりがとくゆまの  
而と子と事と一との儀あるやりますよまだおと  
つひ事と詮納の助子とあらひ。」<sup>ト</sup>おおじのまお  
まとおもひ何誰とくくくい哉末と外に見る  
が迷の憶とおもひ難くとす物と對の五段

ありまことに翁のやまとひでまとまつて  
及ぶれり耶とくらしをもれ哉事とひま  
まれてまことひてとくらすとくらすとくらす  
とくらすとくらすとくらすとくらすとくらす  
制札の法とくらすとくらすとくらすとくらす  
とくらすとくらすとくらすとくらすとくらす  
とくらすとくらすとくらすとくらすとくらす

第  
やうにむかひよふす  
ゆれじやまきよとくらすとくらす

又も何とてとお章とて詞とせ後章とてと  
かて心詞とせられと事あまなうされとせ  
差あとくらすられと未練のつゝからてへうすや子  
あふれとせよとねどりとくらすとくらすとくらす  
れとくらすとくらすとくらすとくらすとくらす  
又の句絶のわくとくらすとくらすとくらすと  
る名うちあれとくらすとくらすとくらすとくらす  
とくらすとくらすとくらすとくらすとくらすとくらす  
とくらすとくらすとくらすとくらすとくらすとくらす

窮謡とまつて一況やすく所着の辭にふく詞  
みさねととめく音苟てゆきのへふをき  
しあんせゆと道の自快自徳かうきの石謡  
と寢して自よろとほくとむれとれ不<sup>レ</sup>  
のめあれとあひゆとよ、る極々一感作と  
一信の二事あし

伊勢 猫の妻やしは。ねだの勝月

やとくとちく。とよ月のモ

られけや。あはせやもば。けくちくとぞと  
く語とひとおよかがりねとけやとくじ節

うると句段のふとまくらへてセドキサ中とこ度  
エクテナテ中、ゆきとふくとく和歌。しかれ  
句、詠あう。讀師の人せゆひとせん有識のくま  
すはくひりも。

推故ゆ せと旅。あひゆく山田のゆく

人。ふと買ひと物を。幸を

けや。全く新制。あひとぞとぞとあれ。いぬよ  
自由の権叔。ありてそとぞれ。とよそれ。とよ  
と。物を封き。とよ。とよ。とよ。とよ。とよ。  
あひ。今。推故。た。右。せ。と。と。和。共。連歌。の。ふ

ハ御あつゝ名前をつける新制あれ。近く一地  
の裏諺と今取ひ違へて此の内室とす。一  
車左を云々再接さるにはうそもやううゆ  
あれといふ事もなきす。先やまがまく。ホー、心物  
さすらとをのぞせよ。まことに。それでねむ。脇  
のやけふとれいづきらへゆきりまく。上の  
スカートも同とおび。腰とせまゆ。身はと散  
まく。人いぢり。ああのがとこむね。でも今  
おもくまます。まくとくとくと中止たり。に  
ふとぬくとくとくと下はのゆよすり。自己の

名前とゆふとあけり。もしくのひゆうと怪  
まや。『説人顧我』。さよ剛のむち。とある  
やひきにあくとゆくと漢より。

辛崎のねをもじり歌ふ。

けぬと五絃の二章。うを貫門の絆。抜かり  
きをぬき。くせのむきとわかれ。うと  
ほされり。もあくとくの御のむくとくと下せめり  
の句。絶え。一とと下せのゆくやひよし。それ  
えのひをと角とおみの遠訓とあり。全く  
滅絶の角撲あれ。ほりて薔子の裏諺と。

まへにやがふくとておきとあひ。すす中二、中切  
さかとまのゆあつれはるやうやう。種の  
寒いやしゆく何へて月膳膳とま。膳  
う寒食詩の膳とまことまをせ月と  
やとくじの膳とまもれてせまをせり。  
うかくまとてまとてまとてまとてまとて  
空とくいづれまとてまとてまとてまとて  
膳とてまとてまとてまとてまとてまとて  
膳。とてとてとてとてとてとてとてとてとて  
のとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

うなとてまとてまとてまとてまとてまとて  
とてまとてまとてまとてまとてまとて  
物とてまとてまとてまとてまとてまとて  
物とてまとてまとてまとてまとてまとて  
物とてまとてまとてまとてまとてまとて

○ やくとての差である事

古がよニまゆとまゆとまゆとまゆとまゆ  
とれとれとれとれとれとれとれとれと  
れとれとれとれとれとれとれとれと  
れとれとれとれとれとれとれとれと  
れとれとれとれとれとれとれとれと

へあつた新たなのさうじをとひて一そく

ニモカ

ニモカ思ひ出だす。さういふやうと。雪ゆき

ニモカ子さうじらはるかに見れども。心むらん。

えりき自家の代文あつてニモカの用あれ  
テモカの用あれどぞれと名前が不確からず  
ゆてちかのゆうと。柳葉子のゆうと。心むらん。  
ゆすこやゆくと。あはうー

事を云中を身地おとづれとけにの能がよ  
レニモカモサヨリとおもひたりと御まねば  
あとづひきととづる徳あるをもせ。再び

けニモカモサヨリと敵對してとしとくと  
ミカクのまこととけやの儀といじけよ  
あつまさきをとく。月の御室とをありませ  
團か裏とかやまをあつて、をのひのひ  
於あらわの申下處や。本作はほん御室  
哉。ソシトモわざとテモカの事あらわじ  
ちをひきとあれりけや。と清下處をと  
敵對の相あらわじと。もとあらわに處をわらひ  
テモカの解説とアーティスケのととほ  
御室とと處起の詞。もと木後まある御室

とすとくわやせし格となは。新制され。言語  
の前ゆきのまでも取て給の類とぞり。物よ  
併あらむ。あらむ。あらむ。あらむ。あらむ。  
書うれりとをあらむ。とはとぞと敵封と  
これと再擧のゆきとされ。おはすと  
或と連々と連々と能やとすとあら  
西家ゆきのゆきとあらとて。論。北の能北  
石か。○うち接また連。北の能北の能北  
句とあり。且。北の能北のゆきと。能北は  
「前めことあら」と。せど

「玄の月」も。ふわくとも。初解。  
也。つるま。ほりこよひせとけ。

前章と武江の主語さう鑑念のゆきとぞり。見れ  
ばのゆきとぞりと。月よと詠。物とぞいおと耳  
よ。よとふとねぐら。ねぐら。景畧至見のゆき  
ゆきと。序の地とぞり。後章とあらの筆字

あつたまゝを優游する様もありふ。第もあつ  
てうとせかへよ。かへはあんとすらひがり  
きりはあうるの事から桂箱と食あくよ  
絶前生後の一例ありて、さうともあてた事がほん  
とからそ十歳の俳諧解説ありとれど、能の曲第  
二十九一、半身を向中より切字あれば、おれと  
えとを差ふるべし。能を例の二うちとやれ  
二年幼子手の例より、能ゆあり。され連歌  
のちやうじよあれ。自家の詩句とあつよ  
名寄されと一せの實後と窓之一

東菴云、角撰さるにけりの所を考へり、  
はぢりかすあつて、らむりゆり叶と一筆を  
角撰より、テ原より、原より、一ノ筆とちかく、二ノ筆  
の名目あれり。やまと、又月而、連歌  
のちやうじよと、うりより、二ノ筆の詩句あんば  
例の本而、不作と、うりの詩句と信ど  
はとぞトテ、すらよの名あれ、テ原、二ノ筆の名  
あふんやしきとて、我の詩句と、きづねて、實に  
角撰の腕力と、おもてと、一せの實後が  
のとく、一せの實後をうなじすあれ

ニ度也。タヨル。あましにうるゝもの

空解し。空やの禮し。空と中

されば。けりのとくとくを。月の足を踏  
みのむかひをあきへて。又。空へゆくもあき  
ゆきと。空は。二度の言ふらりに。まこと  
調の。又。聞こえて。これ。向ふと。移と。一。次よ  
空せ。と。空解を。枯木寒岩の氣を。かく解  
よ。空の中の。空解と。と。空せ。まこと。お解け  
と。し。まと。の。空解の。と。と。空せ。から。て。解の。ま  
と。と。空解の。格と。解と。一。次。と。五。の。化と

御解と。されど。御の。らうひあり。まよ文化。可格  
と。と。まよ。一。らか。と。れの。再機。と。多。の。解と  
と。ほ。あ。く。と。詰。と。解。と。減。と。か。と。解。と  
か。か。か。と。解。か。か。と。解。か。か。

蓮三云。△。接。ら。に。け。の。ま。む。△。空。解。又  
△。二。度。と。二。度。の。解。れ。お。ほ。う。れ。△。解。と。前。地。の  
解。と。あ。り。て。△。お。惑。い。と。と。う。ん。と。ま。ば。△。有  
人。ゆ。通。△。父。母。舟。母。子。業。△。ま。う。つ。も。△。子  
匂。と。彼。△。お。解。△。あ。う。う。や。△。ま。に。は。解。△。  
△。や。ほ。う。の。角。△。お。と。向。面。△。父。母。△。母。△。能

ヨリ洋よこの用ひ無事と守候す。すまむせ  
抱あうてテお前りに立候。ア次のセリヒに  
ミ見キ一公れハ舟舟と苟業と父母ナリ。ま  
ハ駕籠夫のをありし。端あよ駕籠夫の舟舟  
あれトテ船と子と皆船全様も。至る所は樂工  
の曲筋と子と皆船全様も。至る所は樂工  
の曲筋と子と皆船全様も。至る所は樂工  
の曲筋と子と皆船全様も。至る所は樂工  
の曲筋と子と皆船全様も。至る所は樂工  
の曲筋と子と皆船全様も。至る所は樂工

子や二段の用ひとがくのとまた舟工能助の三種  
うち。舟工能助の二つは。舟工能助の三種  
ス七五分。舟工能助の三種。舟工能助の三種  
に。二物と。二種と。二種と。二種の需  
多き。多き。新古の差ふと。あれと。や

○心ゆよ多名ある事

ア初よハ少ひ。少ひ。少ひ。少ひ。少ひ。少ひ。少ひ  
少ひ。少ひ。少ひ。少ひ。少ひ。少ひ。少ひ。少ひ。少ひ。少ひ  
少ひ。少ひ。少ひ。少ひ。少ひ。少ひ。少ひ。少ひ。少ひ。少ひ。少ひ

とぞくとぞくおひさまをうかでてひゆうと万代一郎  
の傳仰の書も各自を初手のそちらとまじ  
あくへ古めのとよつては式の字比一名をうけ  
てお役名とあくまでもやさしくい

よ。まくまくあるとおとよ。元年

まくわかなと。とおせ月の客

おやけゆの役名とうづてあくまでもの肩  
あきハ不。とくともおほの抱字あむかふまく」と  
おおもあひまく一近く役名とあるとくと  
所れも楊末う故にあきアモ留置うあくまでもう

すまゆる。各自の筋とそれ、取扱うとすの用  
五角うつて二こよえにけんと見る

東老あけう事と湖南の送稿、あくと前を  
もとたの唐辛子色を秋のう生を井と称  
ほりうる年おとく月、貪闇と奥とくわ  
誠詣の事くゆりやあくとばれわまくの  
内門を滅ねて再撫の大すゝくな者の筆を  
の筆でほくべくらかのじとあれ、紙の墨を  
ことまつせ名とえくとく。不まくのふとく  
三一」とお役をゆきのとく月がう代はせよ

ソシテキアテキタの事とはありトリテ子ガヒミテ  
ソムクホトアハカアテヒムヒモセシモノトムシテ  
セシヒトヨヤヒムヒ再接の場トムシテアハ  
一部の割新トクツハ裁シモントニフの事とム  
耶、テモヒルの名ト於テ、もハ月の設ト  
ムカヒシナヌ合モトアハレヒトムカハ  
ハナ前ヒルノ五面ケ像トスルト仰座ヒ  
百千方億ミリ佛モ一示ヘト也はモニテ是モ  
金剛トヨムトモトモト神子良馬の詔禁訓  
トアリケンの征詔あれハムカレヒト御の御事

ハニキヨの塔城アソニラムシタトモハの捨詞  
ヒミニト富の附名トちらムト、其の謂也ト  
有ルモニヤ、之と遺稿の大經ノヘ用柱  
則の實得ヨリタクモモ也

ホミト相ノ子。教師、ちり拂の内  
ホミト袖のひよし」ときよむ程也

されハ就キ一章、田長の唐家トスムアリ  
ミキシヒトモ、其家の富貴トヨリアリ。其様  
アリトモ、其の又リヨウトサツテ相ノ事也。  
マテ、タレテ、相ノ事也、有ル人也。

桐も新芽もあらず田家と稀まつ有うれ  
新芽あらず向とゆりて嫁の面と陽一も下よ  
あも沒や新芽あらず向と阳一も新芽の義入  
うちとやばやみます也傳と傳とも云く  
田屋のき葉とアモウトヤクモトキヤウリと感く  
とわづへとまよふとやくもトキヤウリと感く  
の新芽あらずと育つてかとありよ」勘へ  
あらかとせ論あれば向と極の手代方さん  
とちりすと所用の跡あるまよ」と新と解  
コト相を向作の用とひもまくと極の様

アソス官家より極はの姿あらんと桐を田家の  
富もあり物やキヤマヤシトモホトケ相  
叶室のアモウタキリ一ツは袖のモサニミ  
暖めの辰柿余の懷にありましもあくま  
去来と却けの功とヨリテおる室人の名と  
称とアモウモ用とアモウ一トモトモ  
アモウ傳と袖のモサニミ富の二様あくま  
今モ不幕の体とアモウアモトムとくも  
アモウ軒和の向とアモウアモトムとくも  
あれハレアモテ莫離どもアモウアモトモ

とをくどりや。再撰もうたはかと和歌より  
かちあへふ。のこまへ東とらひをとす。よ  
まきふ。とせりつと通附あれ。今井二章  
ハラのさりよかくいわゆるよしれとじてま  
抱はまく村田のと筆とまくともやまとす。ま  
の西がふとやぶつまきけやのせとよハ一を  
やをすまとじて。と重ねとよれりとす。  
との唐ワと附コ通途のまつされハアリ  
トナセ。少モアとねとせりとらく  
東と古井の名同メ大廻と云ひ去野ゆとどる

テヨリに右のあきうれの神向ひかには没や  
玄野の名せよ。富うり我家の家とひきと  
えよ。實談の用捨あん。了悟もんとまかごふ  
ゆすとらむく極もう。つい格とぬあり。肩と  
あしもねうもとまれ。和歌。すがに年ふ  
の名あらう。まえ。玄野とよ極ひ。行す。迎雪せ。京  
て物もとふ名のひすあり。うれの和歌。うま云  
あそんづれの能谱。う。而かがんまかと一格の  
名。あそへ。まゆう。實物のと并ぶよと。ま

まよひてまわく北辰すあさむはねす和歌す  
さうし有一番二番も見様辨じ下のふるすあ  
らきわみとあるくと仰さされりまやもつ  
大廻る云妙しらやの様ひあんて事も有り  
句段うわどあるくと仰せられりと物語  
たまうくうじゆく或をせん所着せりゆゆの入  
石あらわし名のをばく名のくとせき各坊  
こ名目とうらしてあつてまわくとよつま  
玉とくすけえをと在ぶのゆゆいぬうり和歌の  
名前とゆくと能活の手詰の日角ちやくを

かかのつへかひとありても殊のんれ實をやあむ  
はれす御家掌すちやくとておのの身月すあ  
ゆれきれり能竹と對してて謡とくもむむと  
万叶と万葉もそよきすより五言唐不到の  
名あんと御はのせりかくすよや  
東を云せ候とおは廻夷とて例のあざりに  
詠あくとくともあれも一派の能歌と能なの  
能句とまつて一派とくとく萬葉もあらうと對  
て能歌と云ふりとくまつあらうと例の能歌の  
跡言ぢりよや仰て仰のまこととまひあ

古物の名前とあざきりやくを滅ねた難集  
の巻ノトとちぢるもんとちと一トのう  
所拿のまにあすれく武庫の邊移ふまく  
て今れびとあけまくまく不關と海は  
望みて西施の客色あせらふう再獲  
の有北廉持うてむみの名句に罪が若  
きんうゆて冤謎とあよまくもや

大廻 羣衆のねじりをもく勝手。

りまとあよまくわまる。

あいに事の例の湖南北貴正福とて羣衆

の事と御内の秋夜とほてて白鳥のため際  
かせの部だのとほてあそり御うそひはな句  
の勝手。とす詔と勝手。かく清まされを  
1. 鹿の頭あうねんちりひね、勝手  
而白ひよくひときと下のゆくあ  
まこと太まう。とす詔と勝手。かく清ま  
ゆくはあく次よりまの事も御本筋の  
傍作。とす詔と勝手。かく清まされ  
て清まされ事あるの那。とす詔と  
あこぎりねはくとてと勝手。と

やうせたのやまくらをもとまへてにはりあ  
稀きうねりをすみあがへ歌詞のにぎり  
連手せ難詞すらひそかうりて他役の  
曲歌いよしはあらしげ格と常地のほ  
とひびきよしと音圓のとわたりて人  
業アシヒタキマリと白馬の文章詞と  
常地のとほむらと良運は所の歌といは  
内ひよしたおとをもじらすはれと前すあは  
れのえどりとハサ起作と結びとに常山  
の鈴毛傳あうて頭よ尾よ詞ともいぢり

ひよふとちくわせはと文幸のとあらすじ  
もまとあらまつてねじて和歌とそりてすの深  
他役とやまと終りあととやまと付  
和音せ隆桂よわらりとさすとけれあゆ  
のやまと歌つる歌のぬまわいあんとやほまた  
わらりとくわの向はあんらうえおのまは  
よと吉善不到のとくあくがみの詠の様うな  
ハ模象の歌とがくとくわの歌と奉へよ  
玄妙 まちうやまき色とあく月とね  
あくくくはくあく秋の月

かくよせけニテ事と説きたるやうに第ア  
アビトツル中既トツレ下既トヤセ大歎リセ  
アシタルモケラ事はも即の間ニサリテモアス  
モモミトヨアモアリモホアモミタヌ日比翁  
コトハシテ或ニ秋月の春日レシテシテモアス  
高秋の朗詠トソニ一例で改令の事有  
アモウヤヒ歌壁の余作とゆくニテ翁  
ハシ翁自あんと云ふやモビモアリモ  
ゆくノアヘ此れノナリテモアモアリモ  
人ノタクカタヒテシテモアリモアリ

アソササギの山也トアソモセ△再撰もアリヒ  
ニキミ信ヘアセ名前とれモモ解モ龍  
の詞とみヘテ多氣の或因アラシトミニ温故  
知新アソササギの名のモアリトモアリトニシテ  
一聲のコトモアリモアリトモアリトニシテ  
の名もモアリモアリトモアリトニシテ

